商業部会長報告

第３回商業部会（オープン）は１１月２４日に２４名の出席により開催いたしました。

今回は、今年７月に完成した新屋ガラス工房と秋田公立美術大学を視察し、地域連携への取組みについて、工房リーダーの小牟禮尊人氏、秋田公立美術大学社会貢献センター長の藤浩志氏、同大学助手の田村剛氏をゲストに招いて懇談を行いました。

ガラス工房視察の様子

【懇談の概要】

テーマ：ガラス工房と新屋地域のまちづくり

ゲスト：秋田市新屋ガラス工房　工房リーダー　小牟禮（こむれ）　尊人（たかひと）　氏

○ 若手作家が独立し、ガラス工芸で生計を立てられるようになるには、継続して作品を購入してくれるファンの存在が重要である。

○ ファン獲得のためのガラス制作体験が人気を集めているが、地域住民からは「何の施設か分からなかった」との声も多く聞かれ、ＰＲ不足を痛感した。

○ 現在、独立を目指し工房で学んでいる作家は６人おり、工房に訪れる人と作家の交流機会を増やして、定期的に通ってくれるファンの獲得に繋げていきたいと考えている。

○ 独立するには、ガラス制作の経験に加え、自分に合った機材を自作する方法や作品を売り込む営業などのノウハウを身に付ける必要がある。そのための研修を月１～２回行っており、実際に独立するまでは３～５年程度の時間が必要である。

○ 将来は工房周囲に独立した作家の個人工房がたくさん立ち並ぶようになってほしい。ガラス工芸を地域産業として大事に育てたいと考えている。

ゲスト：秋田公立美術大学　助手　田村　剛　氏

○ 新屋のまちづくりは、地域外からの移住者である「新住民」や「大学関係者」が増加してからも、基本的には地域住民が担ってきたが、人口減少やまちの資源を維持してきた担い手の高齢化が顕著化した平成１２年頃から、新住民や大学関係者らとの協働が模索され、平成２５年５月に「あらやちゃぷちゃぷ大学」が発足した。

○ せせらぎ水路は、綺麗な地下水が流れているものの、昭和６１年までパルプ工場の排水路であったため「汚い水」「入ってはいけない水」という地域住民の印象が払拭されておらず、水路に入って遊びながらお掃除することで、地域住民の印象が変わるのでないかと考え実施した。

○ 今では、新屋地域の子供達も参加してくれるようになり、水路が身近で豊かな空間であることを再認識してもらうための灯篭流しも行っている。

○ 今後も、地域住民、新住民、大学関係者の三者連携による新屋地域のまちづくりに取り組んでいきたい。

テーマ：秋田公立美術大学が取組む地域連携

ゲスト：秋田公立美術大学　社会貢献センター　センター長　藤　浩志　氏

○ 秋田公立美術大学大学院では、「秋田市中心市街地活性化に向けた提案」をテーマに、学生の視点で２つのチームが中心市街地の様々な課題を抽出し研究に取り組んできた。

○ また、秋田公立美術大学では、研究成果を地域社会に還元するため、社会貢献センターを設置している。

○ 大学に集積された美術・デザインの「知的財産」を活かし、多種多様な企業・自治体との共同研究や共同開発、大学主催による講座やアートスクールの開講などを通じて地域連携に取組んでいる。

○ 平成３０年４月にはＮＰＯ法人化し、組織として地域連携・情報発信に取組んでいく予定である。

以上が商業部会からの報告です。